

報告書

第3回読書懇談会「徳島における読書
コミュニケーション育成とネット
ワーク作りプロジェクト」の報告
～徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト
「徳島における読書コミュニケーション育成と
ネットワーク作りプロジェクト」より～

(代表) 依岡隆児 編

2019 年 3 月

目次

はじめに

はじめに	・・・2	近年、大学生をはじめ若者はますます読書をしなくなっている。残念ながら、この読書離れの傾向は徳島県も例外ではない。こうした日常生活における読書の優先順位の低下は、ひとつにはITやデジタル技術によって情報が容易に得られるようになったためであるとされている。こうした状況が続けば若者は、従来なら読書活動が担ってきたであろう創造性・主体性を涵養する機会を持てぬまま社会に出ていくことになりかねない。またITなど新しいコミュニケーションツールが社会人にも浸透しているとすれば、社会人の読書離れも同様の傾向があることも推測される。このような現状に対して、徳島大学でもささやかながら読書推進活動を展開してきたところである。
1 地域交流プロジェクト「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト」について	依岡隆児（徳島大学総合科学部教授）・・・3	
2 これまでの読書啓発活動	依岡隆児（総合科学部教授）・・・4	
3 「金曜の会」を中心にした活動の報告	井戸慶治（総合科学部教授）・・・7	
4 阿波ビブリオバトルサポーター活動報告	関口俊介（阿波ビブリオバトルサポーター）・・・9	その一環として、平成31年3月15日（金）に、徳島大学総合科学部地域交流プロジェクトである「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作り」の報告をする懇談会を開催した。本冊子はプロジェクト・メンバーならびにこの読書懇談会の報告者や参加者から寄稿してもらい、今年度の活動報告を行い、広く供覧に付すものである。
5 高校におけるブックトークの提言	加川怜子（総合科学部4年）・・・11	本報告書の目的は本年度のプロジェクト「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作り」の総括をすることであるが、ここにその成果を報告する。徳島県下で読書推進に取り組む方々にとって参考になれば、幸いである。
6 サードプレイスによる地域ネットワーク形成と読書会の親和性	星野凜（大学院総合科学教育部博士 後期課程1年生）・・・15	
おわりに	・・・18	

平成31年3月29日

プロジェクト代表 依岡隆児

1 地域交流プロジェクト「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作り」について

依岡隆児（総合科学部教授）

<メンバー>

依岡隆児（総合科学部）

井戸慶治（総合科学部）

佐々木奈三江（附属図書館）

遠藤博文（附属図書館）

亀岡由佳（附属図書館）

<目的>

「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト」は、平成30年度徳島大学総合科学部地域交流プロジェクトに採択されたものである。徳島において学生や社会人など異なる世代の人々が集う場を作り、読書を通して地域文化を発展させることを目指し、読書交流の振興と活性化によって地域社会と大学との連携をより緊密にすることを目的とした。

<実施内容の報告>

読書好きの徳島大学の学生・教職員と読書活動に携わる社会人を集め、読書会や読書イベントを学内外で開催することで、読書のコミュニケーションを推進した。具体的には、昨年度の同地域交流プロジェクトだった「徳島における読書交流支援プロジェクト」を継承し、推薦図書ブックリストを作成してきた。また、当初から協力依頼されてきた徳島県の高校生ビブリオバトル普及と県大会運営に協力するとともに、本学の学生サークルである阿波ビブリオバトルサポーターの活動、特にビブリオバトル全国大会地区予選大会の運営を支援していった。さらに徳島の「まちライブラリー」にも助力し、そのネットワーク化を進めた。こうした成果は、年度末における同活動の成果報告会開催と、今回のプロジェクトで作成するブックリストを県下の高校・図書館に配布することで、周知に努めた。

徳島大学附属図書館との密接な連携のもと、徳島県下の図書館、県立文学書道館、県教育委員会との関係を一層強化して、活動の横のつながりを構築した。

その締めくくりとして、平成31年3月15日に徳島県下の関連団体とともに第3回読書懇談会「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト」を総合科学部第1会議室にて開催し、本プログラムの活動について報告した。26名の参加者があり、附属図書館、徳島市立図書館、徳島県立図書館などからの出席者も得て、徳島県における読書コミュニケーションのための意見交換を行った。なお、この懇談会については報告書を作成し、県下の関連組織に配布することにした。この懇談会のプログラムは以下の通りだった。

日時：平成31年3月15日（金）18時～20時

場所：徳島大学総合科学部1号館第1会議室

発表内容：（発表題目は仮題）

18:00-18:05 開会のあいさつ

依岡隆児（総合科学部教授）

18:05-18:20 「金曜の会」を中心にした活動の報告

井戸慶治（総合科学部教授）

18:20-18:35 神山における読書会活動について

駒形良介（神山町役場）

18:35-18:50 読書クラブの活動報告

吉岡滋（六一会）

18:50-19:00 阿波ビブリオバトルサポーター活動報告

関口俊介（阿波ビブリオバトルサポーター）

19:00-19:10 高校におけるブックトークの提言

加川怜子（総合科学部4年）

19:10-19:20 サードプレイスによる地域ネットワーク形成と読書会の親和性

星野凜（大学院総合科学教育部博士後期

課程1年生）

19:25-19:55 意見交換会

19:55-20:00 閉会のあいさつ

なお、このうち「高校におけるブックトークの提言」は発表者が都合より欠席し発表できなかった。また懇談会のスケジュールは大幅にずれ込み、終了は 20 時 40 分となった。

＜その社会的効果＞

本プロジェクトの前身である「徳島における読書交流支援プロジェクト」は、読書啓発活動によって徳島県下の関連機関との間に有意義な交流を生みだしてきた。本プロジェクトはこうした流れを一過性のものにすることなく、引き続き文化関連組織をつないでいく役割を担い、地域社会に文化の気風を培うことを目指すものだったが、それもある程度実現できたものとする。また、学生が社会人と共同作業することで刺激を受け社会性を身につけるとともに、社会人の方もこうしたプロジェクトに関与することで大学を身近に感じるようになったことがうかがえた。それゆえに、この活動は大学を地域社会により一層開かれたものにする一助となったと考えられる。

2 これまでの読書啓発活動

依岡隆児（総合科学部教授）

ここでは私が関わってきた「まちライブラリー」である「ビブリオラボとくしま」の活動を報告する。

「まちライブラリー」とは磯井純充氏が提唱した読書を通して人の交流を生みだすもので、関西を中心に広がりを見せている。カフェや公民館、図書館、交流スペースなどに寄贈本をシェアするための本棚を置いて、町なかで本を通して人との交流を図っている。

既存の読書グループも参加して、ホームページやフェイスブックを立ち上げ、蔵書登録のシステム（「リブライズ」）も利用している。また年一度、ブックフェスタを開催し、ブックスポットごとにイベントを実施している。2018 年度の BOOK FESTA 2017 in KANSAI では 143 カ所のブックスポットで、282 のイベントが開催された。「ビブリオラボとくしま」もこれに参加し、「古本市とブックトーク」というイベントを 2019 年 5 月 12 日と 13 日に「ウィアード・カフェ」にて開催した。

「ビブリオラボとくしま」とはこの「まちライブラリー」に賛同して、2015 年から徳島で活動をしている読書グループである。お勧め本を持ち寄り紹介あうというスタイルを基本に、イベントを適宜絡めて、すでに 3 年以上、月 1 回のペースで、これまで 40 回以上開催してきた。会の趣旨は以下の通りである。

キャンパスで、町で、本をシェアしよう！

本を通したゆるやかな仲間づくりを目指し、カフェ・サロンのような雰囲気の中で、自由に交流する。忙しさの中で見失われがちな読書の習慣を取り戻すことで地域の読書文化を育て、精神的・文化的に豊かな社会を形成する一助としたい。

活動内容は、まちライブラリー、もしくはリトル・フリー・ライブラリーで本をシェアしたり、読んだ本を持ち寄り、自由に談話したりしながら

文化交流を行う。また読書関連の催し（ビブリオバトル、読書会、ブックトーク、講演会、異文化交流会など）を随時開催する

対象：社会人、学生、教職員、中高生

会場：大学近辺のカフェ（「ふりく」「ウィアード・カフェ」）

2016 年度におけるまちライブラリー「ビブリオラボとくしま」の実施内容は以下の通りだった。

5 月 7 日（土）15 時～18 時 ブックフェスタ「徳島ブックカフェ」

6 月 18 日（土）17 時～19 時 「映像と文学」談話会

7 月 16 日（土）17 時～19 時 「怖い本」

8 月 20 日（土）17 時～19 時 「浴衣で読書会」

9 月 17 日（土）17 時～19 時 「東アフリカ Day」

10 月 15 日（土）17 時～19 時 「ハロウィン仮装・方言でブックロールショー」

11 月 19 日（土）17 時～19 時 「一箱古本市」

12 月 17 日（土）17 時～19 時 「音楽ライブと朗読&本の交換会」

1 月 21 日（土）15 時～17 時 「和風読書会」

2 月 18 日（土）15 時～17 時 「温泉と読書」

3 月 18 日（土）15 時～17 時 「今年度ベストブック」



図 1 会のシンボルとしての本棚



図 2 「ビブリオラボとくしま」の活動

（2016 年 12 月、きものカフェ「ふりく」にて）

このように企画として、ビブリオバトル、朗読会、お試し読書会、和服をドレスコードにした読書会などを行い、多彩だった。



図 3 「ビブリオラボとくしま」のお茶会（同年 8 月）



図 4 「ビブリオラボとくしま」が古本市「ブックバザール」で参加した SunSun マーケット（2017 年 8 月）



図 5 (上)、図 6 (下) 「ウィアード・カフェ」での古本市 (2016 年 11 月)

ビブリオラボとくしまは、他団体と共同企画も行ってきた。また次々と関連グループがここから生まれて、互いに排除しあうことなく、むしろ双方に所属するメンバーによって結び付けられときに協力し合い、並存していることを大きな特徴としている。読書会は数人から 10 人までの規模でやるのが理想的だろう。会がある程度の人数になったら、メンバーが別のグループを作ることは自然の流れであるし、地域の読書活動としてはむしろ望ましいと考えている。この考え方がグループをオープンにして排他性を防ぎ、メンバーの主体性を発揮できるようにしているようだ。またグループ間の横のつながりを生むので、合同イベントが可能となっている。

他の団体やグループとのコラボとして、以下のようなものがある。

- 音楽グループとの朗読音楽会
- 徳島在住外国人による東アフリカデー
- お茶会読書会
- SunSun マーケット、ファーマーズマーケットへの古本市 (「ブックバザール」) 出店

まちライブラリー「ビブリオラボとくしま」は、常時 10～15 人の参加者があり、延べ人数は総勢 30 名以上であった。幅広い年齢層 (20 代、30 代、40 代、50 代) の、多様な参加者 (学生、社会人、教員) がいる。メンバーの主体的活動を尊重し、新しい企画を後押ししているのも、新しいグループが次々育っていくことができた。そしてカフェで例会を行うことで、地域の中に拠点をつくることができた。こうした点がこの活動の成果だった。

一方、課題としては、低年齢者層と高齢者層の人の参加が少ない点がある。学生や壮年層中心であることはよいことではあるが、それゆえに他の世代の人たちには敷居が高いと感じられているようだ。高齢者層にとって、読書会というと学習・勉強というイメージが相変わらず強いことも一因かもしれない。まちライブラリーのように、楽しみながら自由に他の人たちと一緒に場を作っていくという点が、残念ながらまだ十分には理解されていないようだ。共創的な場への転換が、本グループのみならず、これからの現代社会における諸活動の課題となるのではないだろうか。

以上の読書活動体験から、読書コミュニケーションのポイントとして、フラットな関係、自発性、オープンさ、多様性、居場所の重視を挙げたい。運営方法としては、ゆるやかな組織化と主体性を活かした活動を追求するべきだろう。小グループ方式、推薦図書持ち寄り式、イベント・コラボ式、カフェなど町なかでの例会開催は、活動を継続させるために有効であると考ええる。

3 「金曜の会」を中心にした活動の報告

井戸慶治（総合科学部教授）

「まちライブラリー」とは、読書好きの人たちによる地域のサークルで、小規模な図書室を作ったり読書会などのイベントをしたりするものを指すようだ。私の参加した「金曜の会」もそのひとつであろうが、ここではこの会とその周辺の諸団体の活動について概観したい。会の名称は、月例会が原則第三金曜日に（徳島大学附属図書館1階オープンスペースで）開催されるところから2016年頃につけられたが、実質の活動はその一年ほど前から始まっているようだ。月例会の参加者は10名から20名程度までで、中核メンバーとして学生5-6名、社会人4-5名、図書館職員3名、教員4-5名がいる。その目的は、あまり潤沢とは言えない資金の出所である徳島大学総合科学部「地域交流プロジェクト」の成果報告書によれば、次のようなものだ。「徳島において大学生や社会人など、異なる世代の多様な人々が、ゆったりした雰囲気です定期的に、持続的に集う拠点を作り、読書を通して地域の文化をより発展させる。」結論を先取りすれば、地域文化の発展に貢献したかどうかはわからないが、「異なる世代の多様な人々が、ゆったりした雰囲気です定期的に、持続的に集う拠点を作り」という部分はかなり実現できたと思う。

実際の活動の中心は、推薦図書ブックリストの作成である。2015年度は特にテーマを定めず、31冊を選んだ。それ以降は、以下の6つのテーマを設定してそれぞれ5冊ずつ、さらにいずれかのテーマで1冊を加え、やはり合計31冊の選書をおこなった。2016年度：「装丁が好きな本」「旅の本」「こっそり薦めたい本」「笑える本」「珠玉の短編集・詩集」「もとネタのある本」。2017年度：「音楽の本」「美術の本」「悪の香り」「異世界との接触」「動物の本」「古典に親しむ」。2018年度：「植物」「謎」「舞踊・演劇・映画」「本の本・文章の本」「乗り物」「奇人・変人」。決定にいたるプロセスは以下の

通りである。まず、月例会でひとつのテーマについて各メンバーが3点まで推薦図書を挙げ、それについて数分間の説明をして、質疑応答など他のメンバーとのやりとりをおこなう。それが一通り終わって年度末頃には、挙げられた本をリストアップして投票となる。各メンバーはそれぞれのテーマにつき、本の総数の三分の一まで選ぶことができる。この投票結果を踏まえて、全体での協議により計31冊を選出する。この最終結果をブックリストとして冊子にし、デザインは学生がおこない、出来上がったものを県下の図書館や高校、書店などに配布している。その他の活動としては、これまでの読書体験を系統樹のような見取り図にした「偏愛マップ」を各人が発表する機会が、二度設けられた。これによりメンバー相互の共通点の発見があり、特にあまり知られていない本やマニアックな本が一致した場合には親密さの度合いが急速に増し、互いの情報交換にも役立った。今後も、例えば新入会員には名詞代わりに「偏愛マップ」を説明とともに提示してもらうなど、読書サークルにおいて有効なツールとして一般的に使用できる。

「金曜の会」とゆるやかに関連した団体もいくつか自然発生的に生まれ、たいていのメンバーは複数の団体に参加している。まず、読書サークルとしては「ビブリオラボとくしま」があり、第三土曜日に喫茶「ウィアード」にて開催されている。毎回テーマを決めてメンバーが本を紹介するという同様の活動をおこなっているが、ブックリストの作成はしていない。他に「ウィアード」と協力して読書啓発イベントを支援し、各人が自分の本を持ち寄って即売する「一箱古本市」への協力などもおこなった。その他「雑ラボ」などの団体もあるが、いずれも私はあまり参加していないのでこの部分はこれぐらいで。

関連団体のひとつ「温泉部」は、上記読書サークルの中の温泉愛好家たちにより作られた。部長は学生で、特別顧問として旅行会社勤務の社会人が助言し、この二人が企画を立案している。これまで温泉旅行や温泉関連本の紹介、温泉地の文化文学の探求

などをおこなってきた。具体的な行き先などについては、以下の通り。1) 2017年2月、「月が谷温泉」に日帰り入浴と食事で、参加者は十数名。その後徳島市に帰り、喫茶「ふりく」にて、「ビブリアボとくしま」会員と合同で温泉関連本の相互紹介をおこなった。2) 同年7月、「道後温泉」に一泊旅行で、参加者は9名。松山城を見物し、漱石の「坊っちゃん」について語り合い、俳句教室への参加と実作、砥部焼の絵付けなどをおこなった。3) 2018年1月、「白浜温泉」に一泊旅行で、参加者は8名。南方熊楠記念館や温泉博物館を見学し、「崎の湯」他三つの外湯にも入湯。4) 2019年3月9日、有馬温泉に日帰り、参加者は12名。入湯後温泉街の散策や企画者による文学関連のクイズについてやりとりをおこなった。

もうひとつの関連団体に「映画鑑賞会」がある。2017年2月に発足し、毎月前半の土曜日に総合科学部2号館1階「地域連携小ホール」にて開催され、過去2年間で22回の上映会をおこなった。会場は大きな画面と音響設備を有し、格好のミニ映画館的雰囲気を持っている。月例会参加者数は、3から10名である。上映映画選定の方針については、既定のものがあつたわけではなく、会を経るにしたがって徐々に形成されてきた感がある。当初は戦争関連映画を中心に、「すぐれた戦争映画はおのずと反戦映画になっている」をモットーに上映作品を選んだ（「遠すぎた橋」「永遠のゼロ」）。その後、参加者の確保と継続性も考慮して、戦争関連映画とそれ以外の映画を原則隔週とした。良質の映画だが一般の映画館やテレビなどでは上映の機会がほとんどないもの（「キャタピラー」、「田園に死す」4月予定）や超大作（ソ連版「戦争と平和」4部作）も取り上げ、同じ題名の新旧もの連続上映（「ノスフェラトゥ」1920年代と70年代）も試みたが、これらの企画は大学で実施する鑑賞会にふさわしいと考えている。また制作国、時代、ジャンルなどの点で、全体として多様性を考慮している（フィンランド「ウィンター・ウォー」、インド「バーフバリ 王の凱旋」、中国系移民を描いた「ジョイ・ラック・

クラブ」）。新しい作品も無視するわけではない（「シン・ゴジラ」）。しかし、面白い（面白さにもいろいろあるが）か感銘を与えるものであること、は必須の条件であり、これは上映側にとっても鑑賞者側にとっても自発的な活動や参加を喚起する点で最も重要だと思う。ついでに言うと、原作が文学作品、小説の映画もかなり多い。また、多様性の確保や自主的参加の促進のため、映画の推薦や解説文の執筆を複数の参加者にローテーション的に依頼している。参加者たちの「映画偏愛マップ」も参考にした。

これらの団体の活動がうまくおこなわれてきたとすれば、その要因はなんだろうか。以下の四点を挙げたい。1) ゆるさ、2) 楽しみの共有とそれによる自発性、3) 拠点の確保、4) 中心人物と中核メンバーの存在、である。まずゆるさであるが、会員費も会員名簿もなく、あるのは連絡用メールアドレスのリストぐらいである。「去る者は追わず、来る者は拒まず」「無理をしない、させない」という原則が暗黙裡にあるように思う。その結果、各人の参加・出席の状況については、一度きり、たまに来る、時々来る、ずっと来ていたがこなくなる、その逆、常連、などさまざまである。

第二の、楽しみの共有とそれによる自発性については、特に読書サークルにおいて、インプット（情報摂取、新しいことを知る楽しみ）もあるが、それよりもある程度反響を期待できる人たちを相手に、アウトプット（プレゼン、文章作成）の楽しみがあるように思う。例えば推薦図書の説明のさいに一応時間を設定してはいるが、誰もががついつい長く話をしてしまい、全体として超過することが少なからずある。いったんスイッチが入るとふだん静かな人が早口饒舌になったりもする、その落差が面白く、話の内容よりもむしろ各メンバーの個性の現れが興味深い。基本的には、この個性を尊重しあうという寛容の気分や、親しき仲にも礼儀ありということもあるように思われ、これには社会人メンバーの存在がよい影響を与えている。

第三の拠点の確保については、ゆったりとリラックスして集い語り合う決まった場所があることで

ある。関連の喫茶店の理解ある店主、助力を惜しまない図書館の職員メンバーの存在も大きい。

第四の中心人物と中核メンバーの存在については、読書サークルにしても周辺の派生的団体にしても、中心人物（世話人、主催者）一、二名が基本的な企画を立て、それを基礎に中核的メンバー数名がかなり積極的に関与するというパターンが共通して見られる。いずれにおいても主体的に情熱をもってなされているのは、活動そのものとその共有の楽しみがあるからであろう。

以上のようなわけで、金曜の会とその関連諸団体においては、以下のアフォリズムの内容が当てはまっているのではないかと思う。

真のクラブは、研究所と社交界との混合である。それは、研究所と同じようにある目的をもってはいるが、特定の目的ではなく、不定の、自由な目的である。つまり、人間性一般がその目的なのである。目的といえば、すべて真面目なものであるけれども、社交界であるかぎりには、あくまで愉快なものなのである。

（ノヴァーリス、前田敬作訳『日記・花粉』現代思潮社、1968年、127頁）

このような諸団体の活動に過去二三年関与できたことを、そのすべてのメンバーの方々と、全体の基本方針を定めて温かく見守っていただいた主催者の依岡先生に感謝したい。

4 阿波ビブリオバトルサポーター活動報告

阿波ビブリオバトルサポーター活動報告

関口俊介(阿波ビブリオ
バトルサポーター)

阿波ビブリオバトルサポーター 活動報告

関口 俊介（総合科学部1年）



阿波ビブリオバトルサポーターとは？

5分間で本のプレゼンを行うゲーム、
ビブリオバトルを徳島に広めることを
目的とする団体

現在の部員数

2年生：1名

1年生：2名

計3名



2018年度活動報告①

図書館系サークル新入部員歓迎会

- ・4月13日（金）開催
- ・Library Workshopと合同で新歓を開催した。
- ・1年生の参加者はわずか2名だったが、2名とも入部してくれた。
- ・ビブリオバトルのデモンストレーションを行った



2018年度活動報告②

晴耕雨読ビブリオバトル会

- ・5月21日（月）開催
- ・新歓も兼ねたビブリオバトル会
- ・参加者は全体で6名、うち1年生1名（部員は除く）



2018年度活動報告③ 第二回ビブリオブレイク (テーマ：夏のホラー)

- ・ 7月6日（金）開催
- ・ ビブリオブレイクとは読書会のこと
- ・ 参加者は全体で5名、うち1年生2名
(部員は除く)



2018年度活動報告⑦ 画集ビブリオバトル

- ・ 12月27日（木）開催
- ・ 画集限定のビブリオバトルと読書会を開催
- ・ 参加者12名、うち1・2年生0名



2018年度活動報告④ 全国大学ビブリオバトル 地区予選

- ・ 10月5日（金）開催
- ・ 参加者は全体で10名、1・2年生は0名
- ・ 全国大学ビブリオバトル2018～大阪決戦～
四国Bブロック地区予選を行った。



2018年度の目標

1. 1,2年生のイベント参加者数のべ10人以上
(部員は除く)
2. イベント参加者数のべ30人以上
(部員は除く)
3. 年5回以上イベントを行う
4. 新入部員を3人以上獲得



2018年度活動報告⑤ 徳島大学常三島祭出展

- ・ 11月3日（土）出展
- ・ Library Workshopと合同で出展を行った。
- ・ 部員のおすすめの本の展示や、読書に関する
アンケート企画、来場者にしおりをプレゼント
した。
- ・ 来場者110名



目標達成度

1. 1,2年生のイベントのべ参加者数
10人以上(部員は除く)



のべ3名
目標達成度30%

2018年度活動報告⑥ 全国大学ビブリオバトル地区決戦

- ・ 11月24日（土）開催
- ・ 全国大学ビブリオバトル2018～大阪決戦～
四国Bブロック地区決選を行った。
- ・ 参加者14名、うち1・2年生0名



目標達成度

2. イベント参加者数のべ30人以上
(部員は除く)



のべ49名
目標達成度163%

目標達成度

3. 年5回以上イベントを行う



合計6回開催

目標達成度120%

目標達成度

4. 新入部員を3人以上獲得



2名獲得

目標達成度67%

2019年度の活動方針

- 1、2年生が興味がありそうなテーマのビブリオバトル会を開催
(例：勉強、就職など)
- 漫画限定ビブリオバトルなどもっと親しみやすいイベントを行う
- イベント会場を変えたり、景品を用意したりして、開催方式を工夫する
- 各イベントでの勧誘強化

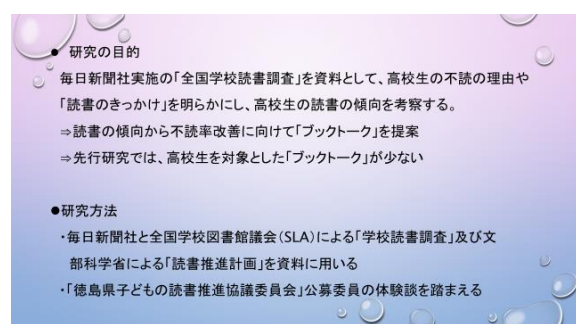
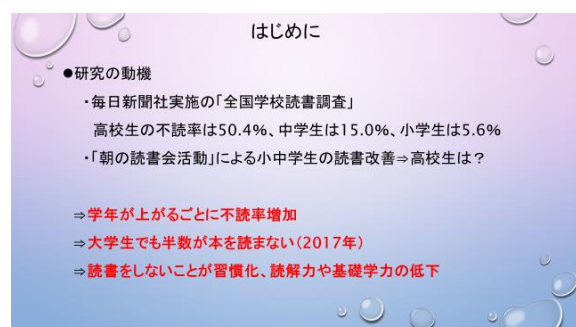
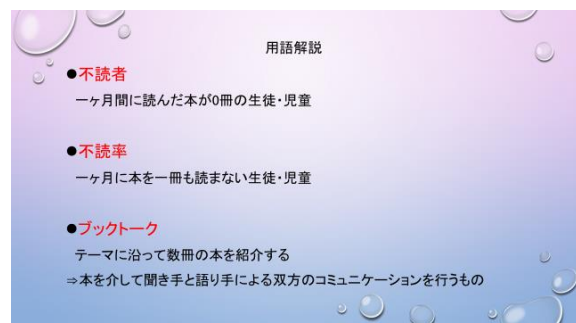
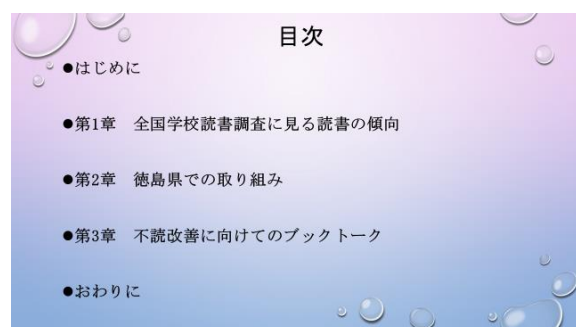
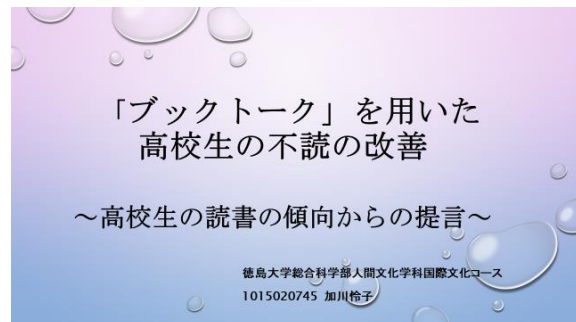


2018年度まとめ

- ・大学祭出展、画集限定ビブリオバトルなど新しい取り組みを多数行った。
- ・どのイベントも好評だったが、全体的に参加者が少なく、固定化されている傾向がある。
- ・Library Workshopとの連携が強化された

5 高校におけるブックトークの提言

加川 怜子（総合科学部 4 年）



毎日新聞社及び全国学校図書館協議会が毎年実施している読書調査

調査対象：全国の小学生（4～6年生）、中学

2024年10月10日

中学生の不読率は15.0%、平均読書冊数は4.5冊

高校生の不読率は50.4%、平均読書冊数は1.5冊

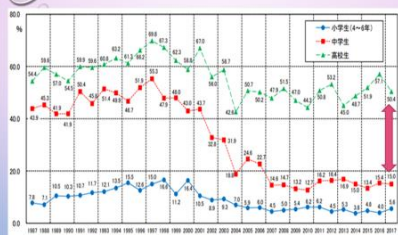


図1「不読者の推移(%) * 1ヶ月に1冊も本を読まなかった人の割合」

(第63回学校読書調査(公益社団法人全国学校図書館協議会・株式会社毎日新聞社))

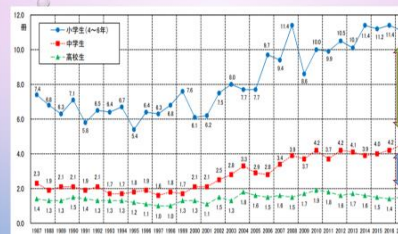


図2 「一人あたりの読書冊数」(冊/月)
(第63回学校読書調査(公益社団法人全国学校図書館協議会・株式会社毎日新聞より))

Ⅰ)2001年「こどもの読書活動の推進に関する法律」(第一次計画)を公布・施行
4月23日が「こども読書の日」に
Ⅱ)2008年「こどもの読書活動の推進に関する法律」(第二次計画)
Ⅲ)2013年「こどもの読書活動の推進に関する法律」(第三次計画)
Ⅳ)2018年「こどもの読書活動の推進に関する法律」(第四次計画 進行中)

⇒第一次計画から第三次計画までの課題
・「地域による読書活動の差があること」
・「学年が上がるごとに読書量が減少すること」

⇒第四次計画

- ①中学生までの読書習慣が不十分なため、発達段階ごとの読書を推進、
②高校生の読書への興味関心の向上に、高校生同士で本を勧め合う「ビ
リオバトル」(書評合戦)や「ブックトーク、読書会など

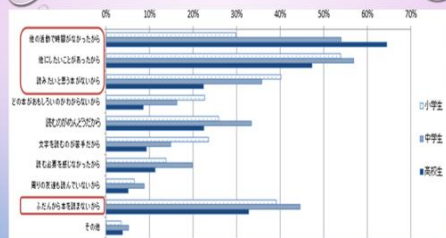


図3「本を読まない理由」(複数回答可) 2017年版
第63回学校読書調査(公益社団法人全国学校図書館協議会・株式会社毎日新聞より)

⇒「他の活動で時間が無いら」と答えた高校生の割合は中学生を上回る
⇒「時間に追われている」と感じている傾向

⇒難しい内容や文学要素を含む作品より、読みやすい本を好むことが伺える。



図4「読書をするきっかけ」 2017年版
(文部科学省「読書調査 関係資料」より)

・中高生共通

「本屋での宣伝・広告、テレビや雑誌、新聞、ネット上での広告」が最も割合が高く、メディアや広告媒体から受ける影響が大きい

・高校生の特徴

「知りたいことや興味・関心がひかれることができたこと」
「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸してくれたりする」と答えた生徒の割合がほぼ同じ

読書意欲が掻き立てる要素

- ・本屋・ネット上での宣伝に興味を抱くこと
- ・自身の興味・関心がひかれること
- ・友達が本を紹介してくること

朝の読書活動(朝の読書)

● 現状

1988年に提唱

- ・全国の小学校・中学校・高等学校の26,927校で実施(2019年1月)
- ・小学校では16,277校
- ・中学校では8,457校
- ・高等学校では2,139校が実施

⇒「みんなでやる・毎日やる・好きな本で良い・ただ読むだけ」の四原則を軸に、授業開始前の10分間に全員で読書

● 課題

- ・高等学校は義務化されていないため、都道府県の采配による
- ⇒本に触れる機会が少ない
- ⇒朝の読書に変わる読書指導

・学校の蔵書不足

・学校図書館と公共

- ・読みたい本が無い
- 学校図書館に公

読書意欲の喚起が

1998年12月15日

第2章 徳島県での取り組み

- 「徳島県子どもの読書推進計画(第三次推進計画)」では、友人同士で本を勧め合う「ビブリオバトル」の手法を取り入れる
⇒「書評合戦(ビブリオバトル)」の校内大会、中学校高等学校は県大会の実施、小学生は県大会の観覧者
- 徳島県立図書館
 - ・徳島大学と連携の中、高校生を対象とした「ビブリオバトル」の大会、高校生図書委員を対象とした「ビブリオバトルの講習会」
 - ・「ブックトーク」は年に1回の頻度で開催、その他「読み聞かせ」

- 高校生を対象としたビブリオバトル研修会
 - ・本好きな高校生でも5分間、本の内容を話すことは難しい
⇒2.3分で終わってしまうグループが多かった
 - ・チャンプ本を決めるため、競争やチャンプ本に選ばれそうな人気のある本を選択⇒結果を気にする
 - ・本が好きな人、話すことが好きな人、本の内容に関して話すのが好きな人
⇒裾野を広げることも重要

●鳴門市立図書館

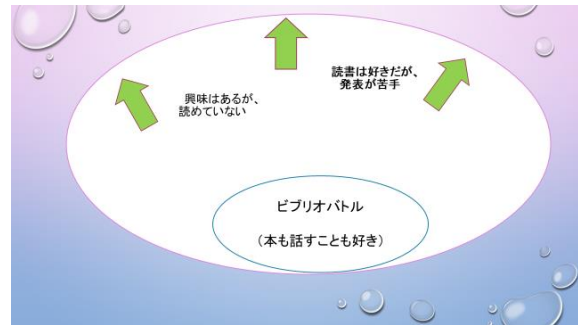
お話ボランティア「モモの会」から「ふくろうの森」が発足、鳴門教育大学・四国大学の学生と連携、子どもたちへの読書イベント

- 小学校低学年向けの「読み聞かせ」や「ブックトーク」
⇒高校生を対象とした取り組みは少ない

表2 平成29年度 四国大学ボランティア活動

名称	時期	実施場所	実施主催者	参加学生	時間
ブックトーク(子どもたちへの本の紹介)/学生グループ	連年	徳島県立図書館、徳島市立図書館、北島町立図書館	日本文学科	日本文学専攻学生7名	10時間

(四国大学ボランティア活動 実施要項より抜粋、筆者作成)



●徳島県子どもの読書推進協議会」の公募委員の活動より

- ・活動は第四次読書推進計画の策定会議での意見交換
- ・高校生の不読率が依然として高いこと、市町村によって実施の割合が異なることが課題
- ・一般の本の読書グループは36グループ
- ・子供の本の読書グループは109グループ(学校図書やPTA読書会も含む)
⇒実施側の人員不足や学校の蔵書不足
⇒図書館との連携、グループ間の協力

第3章 不読改善に向けてのブックトーク

- ・読書指導の変化
「読書」自体への興味関心を図るもの
小学校・中学校での土台作り
⇒読書の習慣化へのきっかけ作り
⇒「時間」や「機会」を作る方策へと変化し、「ビブリオバトル」
(書評合戦)など潜在的な読書量を増やす手法へ

●ビブリオバトルの定義

「お気に入りの本を持ち寄って、その面白さに関して5分程度でプレゼンテーションを行い、どの本が一番読みたくなったかを決める」

人気を集めた理由

紹介する本に決まった縛りが無い、紹介者と聞き手が紹介された本を通して質問や感想を伝えるというコミュニケーションを取る、5分以内にプレゼンテーションを終え、チャンプ本を決めるというゲーム感覚
⇒参加者全員で共有する読書の仕方

●ブックトーク

- ・「一つのテーマに沿ったり、何らかの関連性をもたせたりして、数冊の本を順序良く紹介すること」
- ・生徒たちに「読んでみたい」という気持ちを持たせ、自分で読んでみることで楽しむ」

【目的・効果】
・読書のきっかけ作り
・新ジャンルへの興味を引き出す
・紹介したテーマや著者を知る
・ブックトークを行う大人と子供や、子供同士のコミュニケーションを図る

⇒本稿での定義
「テーマに沿って数冊の本を紹介し、本を介して聞き手と語り手による双方のコミュニケーションを行うもの」

●「ビブリオバトル」の体験

学内で実際に体験

- ⇒「本」を通して観客とのコミュニケーションを図ることで、即興性を楽しむ
- ・サポーター側の人員不足、学内で実施する際のバトラーの参加者・観客不足

●徳島県教育委員会主催による「徳島県立高等学校図書委員研修会」

「ビブリオバトル」に関する高等学校の図書委員対象の研修
徳島大学の学生がデモンストレーションを行い、高校生も実践

●この提案の目的

- 「ブックトーク」を実践的に
・ボランティアや大学生の人に協力を仰ぎ、高校生自身の事前準備や手間を軽減
⇒「ブックトーク」への苦手意識を軽減

・「ビブリオバトル」の5分という明確な取り決めやチャンプ本決めが無い場合、気軽に行えるのでは？

⇒高校生が読む機会がない本にも目を向けてもらうことや、普段あまり関わることがない異世代の人たちとの異世代間交流を図る

6 サードプレイスと読書会の親和性

星野凜（総合科学教育部博士後期課程1年生）

はじめに

近年、SNSをはじめとしたインターネットの利用増加や電子書籍の普及などを背景に、読書推進活動はこれまでの方法論を脱した新たな取り組みが求められていると考えられる。また地域コミュニティ研究の立場からは、地域の中に住民が集まる場所を確保すること、そこでの活動を通して学生と社会人、若年者と高齢者などをつなぎ、地域コミュニティを強化することがめざされていると言える。そうした中で、本という共通の話題を軸に定期的に開催される「読書会」は数多く試みられており、いわば地域コミュニティ活動の定番ともいえる。本項ではこうした背景を踏まえ、「読書会」と「地域で集う事」の親和性に焦点を当て、「サードプレイス」の理論を踏まえつつ読書会の発展に寄与する活動の在り方について考察する。

読書推進活動の課題

大学生を中心とした若者の読書離れが解決すべき課題の一つとして取り上げられるようになったのは昨日今日のことでない。にもかかわらず、若者の読書をめぐる傾向は必ずしも良好とはいえない。小中学生を中心とした朝読などの活動により多少の改善はみられるものの、昨年時点で大学生の半数近くが、全く本を読まない未読者層となっている。¹小中学生に比べて高校、大学生の読書率が芳しくないのには、時間的な制約や、余暇時間に対する選択肢の広がり、読書のきっかけとなる活動の不足等が背景にあると考えられる。特に大学生においては、高校の授業や大学受験に時間を取られ、読書習慣が減少している間に、世間から求められる読書の水準が(中学時と比べ)大きく異なっており、そのギャップのために読書再会のとっかかりを見つけられず

にいる学生が一定数存在するものと考えられる。そのためある種リハビリ的な読書推進活動が必要になってくると考えられる。

筆者の経験上、必要性は理解しつつも手につかないことを習慣化することは、自然と習慣を身につけることに比べて多大な苦勞を要する。これは頭では「いいこと」だと分かっている分、「いいこと」「ためになること」をしなくてはならないという固定観念にとらわれ、より裾野の広い自由な活動を阻害されるためである。今後の活動では、「読書はいいこと」といった(間違っていないまでも)表面的な啓発にとどまらず、より深く広い読書の意義に学生を導くことが求められるが、その過程では「時間をかけ」て「対話を繰り返す」ことが重要視される。

読書をしていれば「時間をかける」ことはさほど意識せずとも可能だと思われがちだが、一方で必要の上的読書においてはいくらか手を抜いてこなすことも可能となる。例えば「レポートに課された図書」を読む(ことにする)には、ページをめくりつつ要点と思われる文章だけを抜き出して集め、足りない部分をインターネットなどの検索で補い、あたかも一冊を通して読んだようにしてレポートを作成することで十分対応可能であり、実際こうした方法で読書レポート等をこなす学生も一定数は存在すると思われる。しかしこうした行為の繰り返しのなかでなされる「読書」は、いわば必要になった時に最低限の労力でこなすものであり、日常的な習慣化にはつながり得ない。対して必要とされるのは、あえて時間をかけることにより、情報スピードの増した日常生活の中で考えなかったこと、取り逃したことについて、今一度見つめなおす機会を得ることである。これはさながら自動車に乗っている時には見つけられなかった小さな変化を、散歩の折に発見するような試みと言える。

「対話を繰り返すこと」の意義は、自身が向き合っているものが生身の生きたものであるということを実感するところにある。日常生活の中で折に触れて他者の存在を、ある程度好意的に受け入れることは、まず自身を客観的に見る能力を鍛え、時に意

¹ 全国生活協同組合連合会「第54回学生生活実態調査の概要報告」
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

見や感性、ものの見方の異なる他者が存在することを認める過程で多様性を確保し、議論のための能力を養成することにもつながる。

こうした意義ある読書活動はしかし、個々人で行うにはハードルが高い。そのため読書会を行うことで上記について考えるきっかけを作ることは重要である。

読書会とサードプレイスとの親和性

ここで近年注目され始めた概念の一つとして地域研究の分野で扱われる「サードプレイス」について言及する。

サードプレイス(*The Third Place*)の語はアメリカの社会学者レイ・オルデンバーグの”*The Great Good Place*” (1989)内において、自宅を第 1 の場所(*The First Place*)、職場や学校を第 2 の場所(*The Second Place*)としたとき、そのどちらでもない「居心地の良い場所」を指して用いられた語である。これは 20 世紀を通して衰退したアメリカ社会での社会関係希薄化を危惧した著者、オルデンバーグが提唱したもので、その特徴は以下のようにまとめられている。

「サードプレイスは中立の領域に存在し、訪れる客たちの差別をなくして社会的平等の状態にする役目を果たす。こうした場所のなかでは、会話がおもな活動であるとともに、人柄や個性を披露し理解するための重要な手段となる。サードプレイスはあって当たり前のものと思われていて、その大半は目立たない。人はそれぞれ社会の公式な機関で多大な時間を費やさなければいけないので、サードプレイスは通常、就業時間外にも営業している。サードプレイスの個性は、とりわけ常連客によって決まり、遊び心に満ちた雰囲気を特徴とする。他の領域で人びとが大真面目に関わっているのとは対照的だ。家とは根本的に違うたぐいの環境とはいえ、サードプレイスは、精神的な心地よさと支えを与える点が、良

い家庭に酷似している。(下線引用者)」²

こうした要素を持った場所は、市民の自発的な参加によって成り立ち、適度な社会関係を提供することで参加者の孤独を防ぐと同時に、議論や会合の習慣が身に付くことが期待される。

サードプレイスと読書会について、オルデンバーグは具体的な言及をしていないが、サードプレイスに期待される要素のうちには、読書会においても求められる要素が多く存在する。例えば「社会的平等の状態にする」こと、すなわち身分や立場を越えた集団を形成することは、よりフラットで多様な対話を促すものである。具体例を挙げれば学生が「教員の期待する読み方、考え方」を過度に付度することなく発言することが可能となり、より自発的な読書体験を実現できる。また「会話が主な活動である」場においては、読書体験やそれに付随する意見を一人のものにせず、多くの人と共有することを可能とする。「遊び心に満ちた雰囲気」や「精神的な心地よさ」は、前述の「ためになる読書をしなくては」という強迫観念や「必要の上での読書」からの脱却の機会を与えるものである。

そのほかにも、読書会とサードプレイスとの共通点として以下の三点が挙げられる。

- 1.自分の時間でありながら常に他者が存在する。
これにより生活の中に他者の意見が入ってくることを許容できるようになる。このことは自分の時間を過ごしつつ、他者の書いたものを読んでいる読書そのものとの親和性も高いと思われる。
- 2.日常生活から切り離された空間を構成する。
変化のない日常から少しばかり離れたたいという要求に、読書(会)、サードプレイスの両者とも応え得るものである。
- 3.興味の範囲が広く、目的が単一でない。
サードプレイスが共通の大きな目的を持った人々

² レイ・オルデンバーグ、忠平美幸訳『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』(みすず書房、2013)、p.97

の集合体でないのと同様に、読書会は「読書」という共通要素はあるものの、そこに参加する人々の目的は様々である。例えばスポーツの好きな人と芸術の好きな人とを、それぞれについて書かれた本を通じてひとところに集わせることが出来るのは、読書会の大きな利点である。これにより単一のテーマコミュニティにとどまらない、幅広い知見を得られると同時に、関連する要素の広さから、参加者にとっての敷居を低くすることが可能である。

これらのことから総じて、読書会を行う際、その場所にサードプレイス的な要素を考慮することは、読書会をより円滑で意義あるものにすることに貢献し得ると考えられる。一方でサードプレイスの要素の一つでもある「自然発生的なコミュニティである」という点については読書会と異なっており、自然発生的なコミュニティの強みである流動性や持続可能性は読書会運営を考える上でしばしば課題として取り上げられる。

実際の活動を通して

筆者がこれまで参加してきた読書会ではサードプレイス的な活動との共通点や差異がいくらか見受けられた。以下にその具体的な例を示す。

- ・「金曜の会」は毎月第三金曜日に徳島大学附属図書館で開催される読書会で、一年を通してブックリストを作成することを最終的な目標とするものである。最終目標は存在するものの、毎月の活動は主にその月のテーマに沿った本を各自持ち寄り、紹介しあうものであり、ブックトークの要素を兼ねている。開催場所は附属図書館のカフェテリアに予約席を設けたものであるため、若干形式ばったイメージは存在するものの、飲食をしながら談笑するという側面が強く、一義的な読書目的にとらわれない幅広い活動が実現していると思われる。また参加者も高齢者から学生まで幅広く、参加者への信頼があれば紹介された本への興味も持ちやすい。

- ・「まちライブラリー・ビブリオラボとくしま」の活動は毎月第三土曜日に行われる。場所は 2017 年度までは徳島大学常三島キャンパス前の喫茶店「き

ものカフェふりく」で、ふりくの閉店後はキャンパス近くの喫茶店「ウィアードカフェ」で開催される。場所が学外であり、開催日が土曜日と言う事もあり、金曜の会に比べて社会人参加者が多く、また参加者もある程度流動的である。ここでの主な活動は参加者発案のテーマに沿って本を持ち寄り紹介しあうブックトークであるが、ビブリオバトルや本を使った即興劇、映画や音楽に関連した話題など、ブックトークの枠に収まらない活動を行うこともある。

上記二つの会ともに、参加者は本という共通の軸を持ちつつも、映画や温泉、音楽など、会を通して幅広い興味を共有する機会を得ており、複数の派生イベントが行われている。参加は強制されず、新規の飛び入り参加も自由である。こうした強い目的意識や厳しい規則のない集まりによって、日常生活にはない社会関係の構築やストレスの解消などが実現しているものと考えられる。

今後の課題と展望

一方でいくつかの課題も見受けられる。例えば金曜の会においては図書館のカフェコーナーというオープンスペースを利用しているにもかかわらず、そこにたまたま居合わせた学生が興味を示すことは極めて少ない。これは読書啓発活動それ自体にも言える事ではあるが、そもそも興味を持たない者を参加に導くためには、一定のアクションが必要である。一方で前述の会は両者ともに参加自由ではあるものの、実際は参加者の知り合いに声をかけるといった方法でしか新規参加者を集めておらず、会員制のサロンと言った印象が強い。こうした結束の強いコミュニティは既存の参加者にとっては居心地の良いものではあるが、新規参加者の獲得が難しい。実際に、学部の参加者は年々減少傾向にあり、今後会全体の高齢化も予想される。今後は学生を主とした新規の参加を期待するところではあるが、広報の際にはやはり本項で述べたような読書活動の魅力や交流の魅力を伝えていくことが必要である。今後の活動の発展に、サードプレイスと読書会との親和性が一定の効果を発揮することを期待する。

おわりに

本報告書では、徳島大学総合科学部地域交流プロジェクト「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト」の活動を中心に、徳島大学総合科学部と附属図書館などによる読書推進活動を報告してきた。「金曜の会」・「まちライブラリー」などの活動やビブリオバトルの活動は大学のみならず、徳島県下において一定の効果があったといえるのではないだろうか。様々な世代の方々が参加する場を作ることができたのは、なかでも大きな成果だったと考える。

2019年3月15日に開催した「読書懇談会『徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト』」においては、上記の報告の他に、駒形良介氏（神山町役場）による「神山における子どもの『ほんのひろば』」についての報告と、吉岡滋氏と高橋静子氏（六一会）による「読書クラブの活動報告」があった。

前者の駒形氏の「神山における子どもの『ほんのひろば』」ではまず、神山町における読書環境について報告があった。学校図書室は決まった時間以外は鍵がかけられているし、本屋や公立図書館が近くになく、車で行くしかない。子どもがそうしたところに一人で行くことは難しい状況である。こうした状況を改善するために駒形氏らがグリーンバレーの協力も得て、改善センターのスペースに県立図書館の図書館廃棄予定本を保管転換した本や寄贈本を整理・配架し、こどもたちの利用しやすい施設を整備し、運営している。

また古民家を改修して一日限定の読書スペースの開放や「里山みらい読書室」の試行、メールグループ「ほほほんクラブ」による読書情報のやりとりなどの活動が紹介された。「里山みらい読書室」では定期的に県立図書館から本を借り出して会場に並べたり、徳島市立図書館の協力によるアニメーションの実践が行われたりしているとのことである。

子どもを取り巻く読書環境の危機的状況を憂慮する地域の方々が智慧を出しあいながら、協力体制を築き、多彩な活動が展開されていることを知ることができた。

ただこうした活動も一部有志のボランティア的活動に負うところが多いという課題も明らかにされた。会場費も有志の持ち寄りで賄っているとのことである。

次に、「読書懇談会」での吉岡氏と高橋氏による報告「読書クラブの活動報告」では吉岡氏が徳島大学開放実践センターの六一会読書クラブの活動について報告した。100人の会員をかかえ、毎月、課題図書読書会と会員のおすすめ本紹介を行っているとのことである。旅行などの会員親睦会の活動も活発である。吉岡氏は個人的には県立図書館の「絵本の読み聞かせ」ボランティアスタッフとしても活動している。また開放実践センターの「生涯学習研究員」としても活動されている。

高橋氏の「六一会」活動の補足説明では、大学祭での公開読書会開催や読書会での課題図書の県立図書館への寄贈についての報告があった。読書振興大会での他グループとの親交を実現してもらいたいとの要望も出された。

課題としてはシニアの居場所をいかに作るかということと、同様の活動をしている他の読書グループとの横のつながり・交流をいかに作るかということが挙げられた。

読書懇談会の最後の意見交換会では、徳島大学の教員のほか、徳島市立図書館の廣澤氏や徳島県立図書館の小松氏、「ジオジオおはなし広場」の本浄氏、「すずらん文学会」の鈴木氏、その他の方々からそれぞれの立場で活動紹介をしていただいた。

今回の懇談会の報告や意見・コメントを聞いて、主催者のひとりである私は、読書活動を成功させるためには、自由さ・自発性尊重とミッション・社会的課題解決の役割自覚とのバランスをいかに図る

かがポイントではないかと思った。活動の意義や使命を共有することともに、活動を持続させるためには、ある種の「ゆるさ」と会員相互の尊重と自由で楽しい、フラットな人間関係を、時間をかけて育てていくことが大切なのではないかと考えるようになった。

それとともに、若者をはじめ地域の人々の読書の幅をいかに広げるかという課題は相変わらず残っている。大学生の二人に一人は一冊も本を読んでいないという調査結果もあり、読書離れは着実に進行しているのである。徳島という地域においても様々な取り組みがなされていることは、この読書懇談会でも報告があった通りだが、こうした活動をいかに有機的に結び付けていくかが問われているように思う。本懇談会は、そのための有意義な報告と今後の課題へのヒントを得ることができた。

とはいえ、読書推進活動は地道に継続していくしかないだろう。その成果は見えにくいもので、即効性のあるものに頼るのにも慎重であるべきである。劇的に変わるといった性質のものではない活動であるからこそ、目の前の活動を大切に、思いついた人から始めるしかない。その「小さな一歩」で少し、しかし確実に事態が変わるのも、この活動の特徴なのである。

また、読書推進活動にここまで携わってきた私は、異なる世代の人たちが関わるのがこうした活動には有効であると確信するようになった。学生と社会人双方が主体的に動き、同じ目線で読書活動を展開し、互いに刺激し合うという仕組みを作ることが大切である。活動に携わる者一人ひとりが世代を超えて、自らより積極的にその活動の輪に入っていく、できれば楽しみながら活動していくべきだろう。

本報告書はいわばそうした試みとして、徳島県に読書コミュニケーションを育成し、そのネットワークを構築していこうとする大学のプロジェクトを紹介するものだった。関係者の皆様の関心を喚起し、同様の活動している方々の励みとなれば幸いであ

る。またこうした活動について、ご意見・ご要望があれば、お寄せいただきたい。

平成31年3月15日

プロジェクト代表・依岡隆児

『第3回読書懇談会「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト」の報告～徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト」より～』

印刷：2019年3月29日

印刷所：グランド印刷

発行：徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト「徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト」

代表・依岡隆児